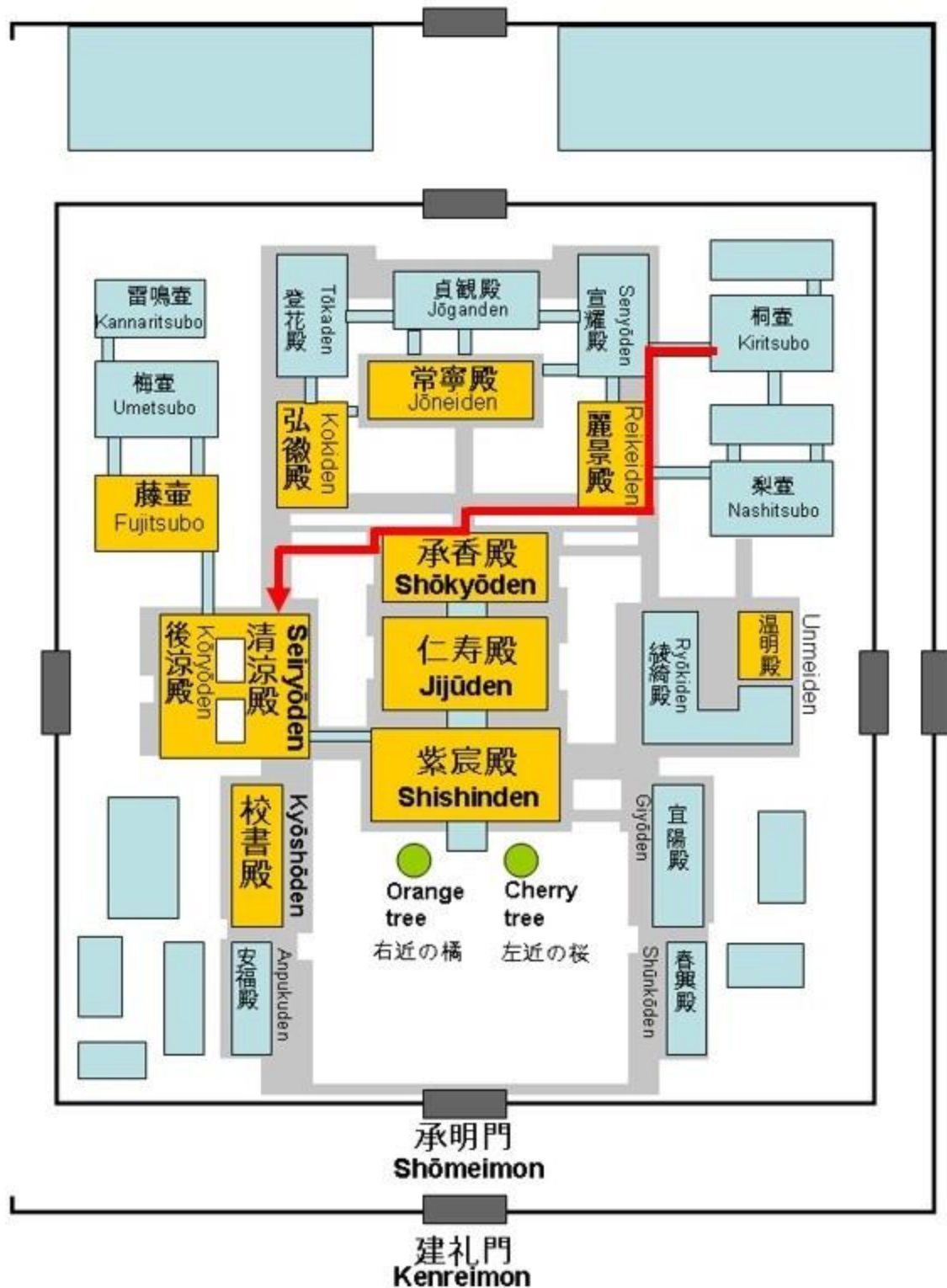


藤原道長は藤原氏の娘を妻とせず、2人とも源氏、それも賜姓皇族(しせいこうぞく)の女性である。賜姓皇族とは皇族として生まれた人が姓を賜って臣下となった人をいう。何故そういうことが行われるのか。この時代は、家柄がよい家庭を前提として、彼らは娘を入内させ、そこに皇子の誕生を期待し、その皇子が帝位に即(つ)くことで、自らは外祖父として摂政・関白となって天皇政治を後見する、といったことを競ったのである。その結果、天皇には多くの妃が入り、沢山の皇子女が生まれることになる。もっとも多い例として嵯峨天皇の30人近い妃と50人ほどの皇子女を挙げることができる。このような状況が続けば皇室の財政が破綻しかねないので、その数を一定に保つためにとられた策が賜姓皇族(臣籍降下(しんせきこうか))の制度である。嵯峨天皇の場合三十人余りの人が源姓を得て(嵯峨源氏)皇族を離れている。その場合、妃の地位の低い人の皇子から臣下としたのである。

このことで想起されるのは『源氏物語』である。主人公は天皇を父としているから歴とした皇族である。しかし、母が妃のなかでは地位が低い桐壺(きりつぼ)に住まいする更衣(こうい)であったために臣下とされ源氏の姓を賜ったのである。いっぽう光源氏の母をいじめた弘徽殿(こうきでん)に住まいする女御(にようご)は、妃としては中宮に次ぐ高い地位だったために生んだ皇子は天皇(朱雀院)になっている。後宮(こうきゅう)(内裏の北半分に設けられた妃らの住まい)の配置を見ても中宮とか女御といった地位の高い妃の住まいは天皇の寝所である清涼殿の夜の御殿(よるのおとど)と至近のところにあり、桐壺などは最も遠いところにあった。それゆえ天皇のところまで来るのに多くの妃たちの部屋の前を通過して来なければならず、嫌がらせや辱めを受けることになるのである。



光源氏のモデルとして藤原道長や源融、源高明〈後者2人は左大臣に至った賜姓源氏〉らが挙がるが、紫式部の脳裏には尊貴性を兼ね備える賜姓皇族があったのだと思う。このことで道長は怒らなかったのだろうか。そのような口実を与えない紫式部の賢明さを思ってしまう。道長自身、が賜姓皇族を妻にしていたのである。

※2月のメニューの窓枠の写真は、京都御苑 清涼殿・昼御座（ひのおまし）と御帳台。帝がお昼を過ごすところです。